

【解説】

第1問 世界史上の宮廷や宮廷文化

A

リード文にあるように、中世ヨーロッパでは君主が国内を巡幸することも多かった。P. 135 の地図Dにはフランク王国のアーヘンが首都として示されているが、近代的な意味での首都ではない。しかし、アーヘンの宮廷における学芸復興はカロリング=ルネサンスと称され、P. 135 の写真⑧の解説からわかるようにイングランドから学者が招かれるなど、アーヘンが当時の西ヨーロッパ世界の中心地であったことは間違いない。

イタリア=ルネサンスの華やかな展開の陰にもパトロン(保護者)がいる。例えば、レオナルド=ダ=ヴィンチはローマ教皇やフランソワ1世の保護を受けた(P. 188 の年表と P. 190 の人物コラムを参照)。また、フィレンツェで活躍した芸術家はメディチ家との関わりが深かった(P. 189 の用語解説などを参照)。

問1 正解④ (世界史上の皇帝の事績) 1

- ①大陸封鎖については P. 220 の③を参照。ヨーロッパ制覇を狙うナポレオンがイギリスの弱体化を目的に出したものだが、かえって大陸諸国の反発も招いた。①の年表で、大陸封鎖令の前にナポレオンがイギリスとの海戦に敗れていること、封鎖後、ナポレオンに対する反乱やロシアの離反が起こること、を確認したい。
- ②ビスマルクは対外的にはフランスを孤立させ、国内では諸勢力のバランスをとってドイツ帝国の実権を握った。P. 229 の③で社会主義者鎮圧法と社会保険制度の「アメとムチ」によって、労働者の協力を得ている点に注目したい。しかし、1890年にヴィルヘルム2世が皇帝に即位するとビスマルクは宰相を辞任し、皇帝自らが社会主義者鎮圧法の廃止など、帝国主義的な対外進出策をとるようになる(P. 256 参照)。ドイツの路線転換は、ロシアとフランスを接近させ、1891年には露仏同盟が成立し(P. 260 の①を参照)、ドイツを挟撃する形となった。
- ③新を称したのは漢の外戚王莽(P. 110 の年表を参照)。則天武后が称した国号は周(P. 116 の年表を参照)。
- ④P. 141 の⑤を参照。ウラディミル1世の改宗以来、正教国家としてビザンツ帝国との関係を持ったロシアでは、モスクワ大公イヴァン3世がツァーリを自称、イ

ヴァン 4 世が正式にツァーリ称号を使用した。これは、ギリシア正教会の擁護者を宣言したことに等しい(P. 141 の写真⑤の解説を参照)。

問 2 正解③ (世界史上の税や税制) 2

- ①P. 110 の年表を参照。前漢武帝の治世については、国内政策と対外関係に分けて整理したい。塩・鉄の専売は中国の社会経済史を見るうえで非常に重要である。巻末で中国の諸制度の変遷が確認できるので、貨幣の発行や流通制度の整備とともに確認してほしい。
- ②まず P. 138 で、ローマ教皇を頂点とする教会ヒエラルキアを見てほしい。このような上下関係で編成された聖職者は、封建制・荘園制のシステムの中では領主であり、支配下の農奴から貢納を得ていた(P. 137 の3・4)。
- ③P. 216 の年表を見て、イギリス本国の統制強化と、それに伴い植民地側の不満が高まる経過を整理しよう。「代表なくして課税なし」のスローガンは、印紙法の制定を直接のきっかけとして生まれたものである。
- ④イギリスのインドからの地税収奪については、P. 245 に詳しい。ザミンダーリー制とライヤットワーリー制の間には土地所有権者の相違がある。いずれにせよ、このような地税収奪と伝統的綿織物生産の破壊は、インド農村社会を疲弊させた。エジプトもイギリスの支配下で対外的従属度を深めた。その様子は P. 243 で確認したい。

問 3 正解① (エラスムスとホルバイン) 3

P. 188 の1を見るとイタリア=ルネサンスの限界として、教皇との結びつき、社会批判意識の欠如が挙げられている。しかし、エラスムスの『愚神礼賛(讃)』のように教会の腐敗を風刺する者もいて(P. 192 の2)、後の宗教改革に影響を与えた。また同時に、ラテン語から離れて各国語を用いた近代文学も生まれ、シェークスピア(P. 192 の人物コラムを参照)などが活躍した。

B

ティムールはモンゴル貴族の家柄であり、トルキスタンからイランを支配してモンゴル帝国の再興をめざした。P. 40 と P. 42 の全体地図でその領域を見ておきたい。ティムール帝国の年表は P. 176 にあるが、オスマン帝国を窮地に追い込んだこと、明への遠征を狙っていたこともおさえておきたい。この当時の明の皇帝は永楽帝であり (P. 166 参照)、鄭和の南海遠征とティムールの遠征が時期として重なる。

ティムールはインドにも侵入していたが、その末裔のバーブルがムガル帝国を建てる (P. 180)。ムガル帝国で発展したインド=イスラーム文化はヒンドゥー文化とイスラーム文化の融合体であり (P. 181 の 4)、ウルドゥー語もその例と言えるだろう。

問 4 正解① (ティムールの本拠地) 4

P. 39 でカラコルムを、P. 43 でサマルカンドを確認しよう。

問 5 正解② (遊牧民の歴史) 5

①突厥はシルクロードを支配下に置いた遊牧国家で、P. 23 で既にその影響がわかる。

唐は婚姻関係などを利用して突厥を服属させ (P. 121 の地図と P. 111 の用語解説)、都護府を通して間接支配する羈縻政策を実施した。羈縻政策については P. 117 の 4、都護府の設置場所については P. 27 を参照。前漢を圧迫した遊牧民族は匈奴であり、武帝の対外政策の重点もその討伐に置かれた。P. 13 の全体地図や P. 111 の 4 で確認したい。劉邦と同時代に匈奴を率いたのが冒頓単于である。P. 111 の 3 を一読してほしい。

②鮮卑は既に P. 17 の全体地図に見える。これが華北に北魏を建てた (P. 23)。

③中国周辺民族の文字については P. 157 の 5 にまとめられている。あわせてその系統図を見ると、中国周辺の文字にはアラム文字の影響 (これは商業活動のひろがりに関係している) と漢字の影響があり、契丹文字は両系統を受け継いでいる。キリル文字は、スラヴ人地域へのキリスト教宣教活動の中でつくられた文字であり、現在のロシア文字にもつながる。P. 140 の用語解説を参照。

④P. 126 の 1 で、イスラーム世界の展開の概略をつかみ、13 世紀がモンゴル人のイスラーム化の時代であり、イル=ハン国によってアッバース朝が滅ぼされたことを理解しておきたい。バグダードを陥落させたのはフラグである (P. 127)。第 7 代ガザン=ハンについても同ページに載っている。ガザン=ハンはイスラームに改宗して聖職者を取りこみ、モンゴル人の軍事力をも合わせて統治を安定させた。

問 6 正解④ (ムガル帝国時代の出来事)

6

P. 180 の年表を見ながら整理してみよう。

- ①ガズナ朝・ゴール朝のインド侵入はデリー=スルタン朝より前。
- ②ムガル帝国時代のインド南部の大国はヴィジャヤナガル王国。サータヴァーハナ朝はクシャーナ朝と同時代で P. 98 に掲載。
- ③『マヌ法典』はグプタ朝時代に完成した (P. 98)。
- ④P. 181 で、非ムスリムに融和的なアクバルと、その正反対のアウラングゼーブを対比しよう。アウラングゼーブの強圧的な施政は、ラージプート諸王国の離反やシク教徒の反乱を招いた。

C

P. 201 にヴェルサイユ宮殿が載っているのを、ペテルゴーフと比べてみよう。

問7 正解④ (ピョートル1世の事績) 7

- ①ロシアのギリシア正教化と言え、キエフ公国のウラディミル1世の改宗を指す。
P. 141 の5を参照。
- ②P. 204 の1を参照して、ロシアの領土拡大と主な皇帝の治世を整理したい。ピョートル1世の時代に領土は太平洋に達しており、ラクスマンを日本に派遣したのがエカチェリーナ2世である。エカチェリーナ2世は、大黒屋光太夫が謁見したことでも知られている(P. 48の人物コラム)。
- ③これもP. 204を参照。農奴制が残存するロシアでは、コサックと呼ばれる逃亡農民を含む反乱が何度か起こった。ステンカ=ラージンの乱とプガチョフの乱はおさえておきたい。
- ④北方戦争で勝利したピョートル1世は、サンクト=ペテルブルクの建設にのりだした。ロシアの西欧化・近代化にも関わった治世について、P. 204 の2や人物コラムを参照。

問8 正解② (宮殿や都市の歴史) 8

- ①鎬京は西周の都である。P. 106の年表と地図を参照。光武帝は洛陽を都として漢を再興した(P. 110の年表)。前漢の長安との位置関係はP. 111の地図で確認したい。両者とも黄河・渭水の流域であるが、長安が政治的・軍事的な要衝、洛陽は経済的な要衝と考えられる。
- ②100年ほど前に「発見」されたマチュ=ピチュ(インカ帝国の都市)遺跡の写真はP. 184に掲載。P. 185のマヤ文明のピラミッドなどとともに、石造技術の高さを確認したい。
- ③豪壮なバロック美術と繊細で優美なロココ美術の違いは、P. 208・209を眺めて知っておきたい。絵画を比較すると違いがわかるだろう。バロックの代表にヴェルサイユ宮殿、ロココの代表にサンスーシ宮殿がある。P. 208の1を参照。
- ④繁栄ぶりを「世界の半分」と絶賛されたのは、サファヴィー朝のイスファハーンである。P. 176の1で、オスマン帝国と争ったアッバース1世の治世とともに確認しておこう。現在も、イマーム=モスク(世界遺産)をはじめ多くのイスラーム建築が、その栄華を伝えている。バビロンは古代メソポタミアの都市であり、そ

のジググラトは旧約聖書の「バベルの塔」のモデルとなった (P. 74 のコラム参照)。

問 9 正解④ (ヨーロッパの文化) 9

- a ランケは史料批判に基づく近代的歴史学の基礎をつくった。P. 240 の 2 を参照。
同時代にドイツ哲学や古典派経済学も発展していく。
- b ルネサンス期のイタリアは統一されていなかった (P. 188 の 1)。他国の争いで
戦場となったイタリア (イタリア戦争) を憂い『君主論』を著したのがマキアヴェ
リである。P. 162 の写真を参照。
- c モリエールは、フランスの絶対王政のもとで古典主義文学 (劇文学) を発展させ
た作家である。P. 209 の 2 を参照。同時期のイギリスでは、政治的な題材のピュ
ーリタン文学や社会を風刺した風刺文学が発展していた。

第2問 ユネスコに登録された世界遺産

A

中世ヨーロッパの商業の発展については、P. 144 に概観がある。北海・バルト海商業圏ではフランドルの毛織物が重要な商品であった。文中に出てくるブリュージュが、ハンザ同盟の4大在外商館所在地であったことも地図で確認できる。このような商業活動を支えたのが、都市の「自由」とギルド組織であった。これも同ページの[3]・[4]で確認できる。

問1 正解① (各地の世界遺産) 10

- ①始皇帝の統一政策については P. 109 の[2]で整理したい。統一貨幣・郡県制・思想統制など、後の歴代王朝に通じていくものも多い。始皇帝の権力の大きさを示す帝陵と兵馬俑坑については、P. 109 のコラムを参照。
- ②アンコール=ワットとボロブドゥールは、東南アジア史を知るうえで重要な遺跡(寺院)。P. 101 にテーマでまとめられている。アンコール=ワットがヒンドゥー教寺院として建てられたのに対し、ボロブドゥールは大乘仏教寺院として創建されたことも、解説文にある。東南アジアの多様性は受験生を悩ませるが、P. 102 の[2]などを利用して、時代ごとの特徴を見ておこう。例えば、アンコール=ワットが13世紀以降のアンコール朝の衰退に伴って、仏教寺院に転じたことも理解できる。
- ③アルハンブラ宮殿は P. 129 に掲載。イベリア半島におけるイスラーム支配を象徴するみごとなアラベスク模様が、今も観光客を魅了している。ビザンツ様式の傑作でありながら、後にモスクに改修された有名な建築物はハギア=ソフィアである。P. 139 参照。
- ④宋の都は開封・臨安で、商業都市としての発展にも注目したい。その背景には運河を利用した流通網の整備があり(P. 154 の地図[A])、繁栄の様子を示す史料として「清明上河図」(P. 154 の[1])を見ておこう。紫禁城は明の永楽帝が創建し、明清代を通して中華帝国の絶頂期を象徴する存在であった。P. 171 のコラムを参照。

問2 正解② (歴史上の職業団体やその集会所) 11

- ①ギルドの廃止は、フランス革命の比較的早い段階で実現する。P. 218 の[1]を参照。国民議会の時期(1791年)の出来事である。

- ②ギルドの組織形態は P. 144 の右下に掲載。商業活動を支える一方，上下関係は厳しく，親方層だけが正式なメンバーで「市民」とみなされるなど，封建的色彩も強かった。
- ③P. 170 の¹にあるように，康熙帝が公行を創立し，乾隆帝がヨーロッパとの貿易を広州に限定した。つまり，朝貢貿易の枠を維持するため，特許商人に委ねたのである。P. 248 の²で，イギリスが広州の公行を通じた貿易体制に不満を募らせ，アヘン戦争に至る過程を確認したい。
- ④明清代の農村経済の発展と，徽州商人・山西商人による流通の発達については，P. 172 の¹を確認しよう。会館・公所のような互助組織が設立された理由もわかる。

問 3 正解③ (東インド会社) ¹²

ヨーロッパ諸国のアジア進出については，P. 210 の¹を参照。17 世紀にオランダがインドネシア方面に進出していく一方，18 世紀にはイギリスとフランスのインド進出争いが激化していく。第 2 次英仏百年戦争は七年戦争(インドではプラッシーの戦いと連動)を経て終結し，18 世紀半ばにはイギリスの覇権が確立する。

- a 七年戦争は 18 世紀半ばであるから，この文は誤り。
- b P. 210 の¹でわかるように，英仏蘭の東インド会社は 17 世紀初頭，ほぼ同時に設立される。フランスのものが再興されるのは 1664 年であり，対外侵略戦争を重ねたルイ 14 世の時代(P. 201 参照)。会社再興の背景には，戦争やヴェルサイユ宮殿造営に伴う国家財政の悪化もあった。

B

問 4 正解② (イギリスにおける立憲王政の確立) 13

国王の恣意的な(独裁的な)政治に対する貴族や議会の抵抗は、13 世紀のマグナ=カルタまでさかのぼることもできる(P.148 の2を参照)。16 世紀以降は宗教改革に伴って、国王を頂点とするイギリス国教会が形成され、国王と議会の対立が表面化することも多くなった。議会派にはピューリタンが多かったことも一因である。

しかし、ピューリタン革命・名誉革命を経て権利の章典が制定されると、議会制定法の優位と立憲王政が確立し、国王と議会の対立に終止符がうたれた。P.205 の年表などを参照してほしい。この後、「国王は君臨すれども統治せず」の伝統も確立する。

問 5 正解① (第一次世界大戦後の出来事) 14

①P.270 の1を参照。世界恐慌に見舞われたアメリカ(フーヴァー大統領)は、ドイツの混乱を避けるためモラトリウム(賠償支払い猶予)を宣言したが、効果は薄かった。

②第3回選挙法改正は19 世紀イギリスの自由主義的政策の1つ(P.226 の2参照)。また、同ページの1も見て、他の自由主義改革も整理したい。

③国際的にスイスの独立が正式承認されたのはウェストファリア条約のとき。P.200 で、主権国家体制確立という大枠のほか、オランダの独立、カルヴァン派の承認、フランスのアルザス獲得など、いくつかの条項は整理しよう。

④P.227 の4を参照。ブーランジェ事件とドレフュス事件は、フランス第三共和政の不安定性を示す19 世紀末の出来事。

問 6 正解④ (牢獄や投獄の歴史) 15

a P.205 でチャールズ2世の王政復古期を確認。不当逮捕を禁ずる人身保護法が制定されている。また、公職を国教徒に限定する審査法も出されている。19 世紀の自由主義改革の中で、審査法の廃止とカトリック教徒解放法制定があいつぎ、宗教的自由が高まる(P.226 の1参照)。

b P.218 の1を参照。国王夫妻が逃亡を図ったのは、プロイセンやオーストリアがフランス革命の動き(民衆の動き)を警戒していて、外国に逃げれば保護してもらえると考えたからである。外国から革命がつぶされるのを防ぐため、フランス

はオーストリアに宣戦し革命戦争が始まる。なお、革命・改革の動きが滞ると、バスティーユ牢獄襲撃やヴェルサイユ行進など、民衆のパワーが爆発する流れも知っておきたい。

C

孔子や孔子廟については P. 108 の人物コラムを参照。儒家思想と儒教・儒学の発展は中国史では必須の知識であるから、巻末の中国史のまとめで整理しておこう。

問 7 正解④ (儒教の歴史) 16

- ①儒学が官学化され、科举で重視されるようになると、正統な古典解釈をまとめたものが必要となる。訓詁学の発達や孔穎達の『五経正義』が重要。P. 112, P. 118 を参照。
- ②民衆の教化をめざした洪武帝の六諭については、P. 166 を参照。
- ③朝鮮への中国の影響は大きい。P. 174 を見て、具体的にどのような影響を受けたか、王朝ごとに整理したい。新羅の律令制導入、高麗の科举採用、朝鮮の朱子学官学化などが確認できる。
- ④P. 102 の年表などを参照。ベトナム北部は李朝(大越)の頃から中国支配を脱し、モンゴルに対抗した陳朝、チャンパーを攻撃し南部に領土を拡大した黎朝という順に発展していく。

問 8 正解① (戦争や外来文化の影響を受けた文化遺産) 17

- ①円明園創建以降の経緯は P. 173 の右下を参照。雍正帝・乾隆帝・カスティリオーネらが関わって、豪華な離宮となったが、アロー戦争で破壊された。あえてそのまま保存され、列強の理不尽な行為を伝えている(P. 249)。
- ②長城の歴史については P. 157 の 4 を参照。もちろん、北方民族の侵入に備えたものだが、威容を誇る現存長城のほとんどは明代のものであり、オイラトの侵入に対するもの。柔然は 5 世紀頃に活発に活動した民族で、P. 23 で確認できる。
- ③南北朝時代の三大石窟については位置も含めて要整理。P. 115 の下部を参照。北朝における国家仏教の発展についても、P. 115 の 2 でおさえおきたい。ジャイナ教もインド生まれた宗教であるが、インドの宗教別人口では 1 % 未満(P. 96)。不殺生の戒律に厳格である(P. 97 の左下写真)。
- ④P. 99 の 4 でガンダーラ場所を確認。大乘仏教東伝の起点となった。一方、ガンダーラ地方は P. 82 の地図 C でわかるように、ギリシア系国家の支配地域となった歴史を持つ。その結果、P. 99 の 3 のような、ヘレニズム彫刻の影響を受けたガンダーラ様式(仏像)が生まれた。同様式はクシャーナ朝時代のガンダーラで発展した。

問 9 正解③ (人民公社の解体) 18

P. 294 の 1 を参照。文化大革命の混乱が続いた後、1976 年に周恩来・毛沢東が死去し鄧小平が実権を握ると、中国が大きく変わり始める。アメリカ・日本との国交正常化や、経済特区設置・生産責任制導入などの改革・開放政策である。

a は中華人民共和国成立直後で、中ソ友好同盟相互援助条約がポイント。b は大躍進政策の失敗や文化大革命など社会主義体制の混乱と、中ソ論争の時代。c は改革・開放の時代。d は c の時代を踏まえて経済大国化していく時代である。

第3問 世界史上の戦争とその影響

A

帝政ローマの領域拡大については、P. 91 が分かりやすい。帝国国境はおおむねライン川とドナウ川であるが、全盛期にはドナウ以北に属州ダキア（現ルーマニア）を設置した。ローマ帝国の東西分裂後、バルカンはビザンツ帝国領となるが、やがてスラヴ系諸国家の台頭（P. 141 の地図[B]）や、オスマン勢力の浸透（P. 141 の地図[C]）が始まる。

問1 正解②（バルカン半島南部の歴史）19

- a アテネがアケメネス朝と戦ったペルシア戦争の展開については P. 80 の[1]を参照。特にサラミスの海戦における無産市民の活躍は、民主政の完成に大きな影響を与えた（P. 81 の[5]）。
- b P. 82 を参照。マケドニアのフィリッポス2世はカイロネイアの戦いでアテネ・テーベをやぶり、ポリス社会の衰退とヘレニズム時代の到来を示した。P. 81[7]のポリスの変質を見て理解したい。

問2 正解③（征服地に対する政策の歴史）20

- ①P. 27 のように、唐は突厥や朝鮮を征服して都護府を置いた。ただし、その統治形態は羈縻政策と呼ばれる間接統治であった（P. 117 の[4]）。
- ②共和政ローマ時代のポエニ戦争の経過は P. 88 の[1]を参照。この初期に属州シチリアが誕生する。一方、属州の拡大がローマ社会に与えた影響も大きく、属州公有地におけるラティフンディアの発展が中小農民の没落につながった。これも同じ年表内に掲載されている。ポエニ戦争→社会の変質→内乱の1世紀→元首政という流れをおさえない。
- ③ミスルはアラブ人の征服地におかれた軍営都市（P. 124）。ビザンツ帝国中期の軍事行政制度は軍管区制と呼ばれるもので、管区ごとに屯田兵が置かれた。P. 139 を参照。
- ④清の統治体制は P. 171 の[3]を参照。直轄地と理藩院を通して間接統治する藩部（モンゴル・チベット・ジュンガルなど）に分かれており、その外側に朝貢国があった。

問3 正解① (人々の移動・定住と国家の興亡) 21

- ①P. 136 の地図Aのように東方からマジャール人が侵入し、スラヴ人に囲まれながらハンガリーを建国する(P. 141 の地図B・C)。
- ②P. 38にあるように、バトゥ率いるモンゴル軍は東欧各地に遠征し、ワールシュタットの戦いも起こった。ウィーン包囲で有名なのはオスマン帝国。特に全盛期(スレイマン1世時代)の第1回ウィーン包囲は、宗教改革時の国際関係にも影響を与えた(P. 195を参照)。
- ③P. 134 の地図Aのようにアッティラ率いるフン人はヨーロッパに侵入し、教皇レオ1世時代のローマにも迫った。ブルガリアはブルガール人の国家である(P. 140の1)。トルコ系ブルガール人のスラヴ化と建国について確認しよう。
- ④オスマン帝国は、その発展の過程で亡国の危機に見舞われた。P. 178 の1でティムールに敗北したアンカラの戦いをチェックしよう。ニコポリスの戦いではキリスト教側の連合軍に勝利している。

B

欧米列強と東アジアの戦争の例として、アヘン戦争やアロー戦争などがある。P. 250 を使って、両戦争に関係する事象を整理したい。南京条約・北京条約の比較検討，朝貢体制の崩壊と中国国内の改革運動など，重要事項が多い。日露戦争も欧米列強と東アジアの戦争だが，こちらはアジア各地の民族運動を促進した側面も持つ。P. 247 の地図 **D** やコラムを参照したい。

東アジアの国同士の戦争としては，日清戦争がある。これは，日本が朝鮮支配を狙う中で起こる戦争である。P. 252 の **1** を見て，日朝修好条規以降，韓国併合までの動きを確認しておこう。

中国国民党と中国共産党は合作と内戦を繰り返しながら，第二次世界大戦の終結をむかえた。その経過については P. 274 の **1** を参照。社会主義中国(中華人民共和国)が成立(P. 275 の毛沢東の写真)した直後，東西陣営がぶつかる朝鮮戦争が勃発した(P. 296 の **2**)。共産主義封じ込めを狙うアメリカは，対日講和を急ぎ，日本の国際社会への復帰は早まった(P. 285 のサンフランシスコ平和条約の写真参照)。

問 4 正解① (19 世紀にイギリスが清から割譲させた領土) **22**

P. 249 の **4** および香港の用語解説を見て，各国の租借地・勢力圏を整理しよう。租借地の設定が日清戦争後になっていることに注目。

問 5 正解② (国民政府の外交政策) **23**

国民党および国民政府の動向は P. 251 の **5** と P. 274 の **1** に詳しい。辛亥革命を経て中華民国を成立させた孫文だが，その後，袁世凱や軍閥との戦いに力を割かねばならなかった。日本に亡命して中華革命党を結成したのも，そのような努力の 1 つである。

① 二十一カ条要求は袁世凱政権に対するものであった(P. 274 の **1**)。

② 中国が第一次世界大戦に参戦した理由の 1 つは，不平等条約の改正にあった(P. 261 の右下)。

③ 義和団事件後の北京議定書に調印したのは清朝政府。義和団事件で扶清滅洋がスローガンに掲げられていたことを想起(P. 250 の **1**)しよう。

④ 中ソ友好同盟相互援助条約は中華人民共和国(共産党政権)が締結した(P. 294 の **1**)。

問 6 正解① (第二次世界大戦後の国際社会の枠組み) 24

- ① P. 287 の [3] を参照。西側陣営の集団安全保障体制の 1 つに A N Z U S がある。
- ② コミンテルンとは第 3 インターナショナルのこと。第一次世界大戦後のロシア革命の中で成立した (P. 265 の [2])。主導権はソヴィエト共産党が握り、他国の共産党が参加した。P. 278 の年表や P. 276 の [3] に見られるように、コミンテルンはファシズムに対抗する姿勢をとり、人民戦線を提唱した。
- ③ 四カ国条約はワシントン会議で締結された (P. 267 の [5] 参照)。太平洋の現状維持など、日本の勢力拡大を牽制したもの。
- ④ 「パクス=ブリタニカ」とは「イギリスの平和」という意味。19 世紀半ばの世界状況を示す言葉で、イギリスの圧倒的な力を背景に世界経済がまわっていたことを意味する。同様に元首政時代の地中海世界を「パクス=ロマーナ」と呼び (P. 90 の [1])、第二次世界大戦後の世界を「パクス=アメリカナ」と呼ぶが (P. 292 の [1])、
「覇権を握る国が存在する＝世界が平和で人々が幸せ」ではないので注意しよう。

C

問 7 正解① (第一次世界大戦中の秘密外交) 25

P. 272 の②を参照。第一次世界大戦勃発後、イギリスは戦況を自国の優位とするため相互に矛盾する複数の協定等を結び、後のパレスチナ問題の発端をつくりだした。フサイン=マクマホン協定ではアラブ人の独立を約束して、対オスマン帝国戦の優位を狙う一方で、サイクス=ピコ協定では、オスマン帝国領の列強による分割も企てた。さらに、ユダヤ系財閥の協力を得るため、同地域にユダヤ人国家建設まで約束して、問題を大きくした。

大戦 4 年目の 1917 年、レーニンが「平和に関する布告」を出して終戦を呼びかけた。その直後、アメリカのウィルソン大統領は戦争終結の主導権を握るため十四カ条を発表する。P. 266 で十四カ条の中身を確認してほしい。秘密外交の廃止のほか、国際平和機構の設立、民族自決の原則など理想主義的な項目が並ぶが、ウィルソンの理想は、対独復讐を狙うクレマンソーやアメリカ議会の態度によって崩れ去ってしまう。

平和十原則は第二次世界大戦後の東西冷戦下で、第三世界の台頭を象徴する。P. 289 の②を参照し、ネルーと周恩来による平和五原則と、アジア=アフリカ会議(パンドン会議)の平和十原則を見て、反帝国主義・反植民地主義がうたわれていることを確認したい。

問 8 正解③ (近現代の科学) 26

常識も問われる問題。②④については P. 241 を参照。ダイムラーとカール=ベンツがガソリン機関と自動車開発の基礎をつくった。ヘルムホルツはエネルギー保存の法則を発見。ファラデーが発見したのは電気分解の法則。ダイナマイトを発明したのはノーベルで、その巨額の遺産がノーベル賞の基金となった。

①③については P. 317 の④や人物コラム参照。ライト兄弟による航空機初飛行、アインシュタインの相対性理論、フォードによる自動車大量生産はすべて 20 世紀初頭の出来事であり、しかも 100 年後の現在、我々の生活に直結している。民間航空輸送の発達、宇宙物理学の飛躍的な発展、極限まで達したモータリゼーションなどを想起しよう。コラムを読むと、アインシュタインがドイツ生まれでありながら、アメリカで原爆開発に関わったこともわかる。フォードの大量生産はベルトコンベヤ方式に支えられたもので、同型の自動車が町中にあふれた。P. 270 の写真を見て

ほしい。

問 9 正解④ (空爆が行われた戦争) 27

- a P. 293 の 4 でユーゴスラヴィア紛争を整理しよう。この地域は、もともとキリスト教国家の支配が長い地域と、オスマン帝国支配下でムスリムの拡大した地域に分かれており、多数の民族・宗派が入り乱れている。第二次世界大戦後はティトー(人物コラムも参照)の指導力のもとで統一されていたが、社会主義体制の崩壊とともに、分裂と紛争を繰り返すようになった。もともと政治的権力を握っていたセルビア人と他民族の対立、および、ムスリム人とキリスト教徒の対立などが主要原因である。
- b 台頭するファシズム勢力とこれに対抗する人民戦線の戦いの典型が、スペイン内戦である。P. 279 の 3 で図式を見て、イギリス・フランスの不干渉政策がファシズム側の勝利の一因と考えられること、この戦争の結果が、ヒトラーの暴走と第二次世界大戦の勃発につながることを確認したい。なお、スペイン内戦で廃墟となった町ゲルニカを題材にしたピカソの大作は、ファシズムに対する批判のまなざしを感じさせる。コラムを読むと、同様に反ファシズム・反ナチズムの態度をとった文芸家が多いことがわかる。
- c パレスチナ問題とそれに伴う中東戦争については P. 302 を参照。中東戦争ではイスラエル側が優勢で、特に第 3 次中東戦争では、ゴラン高原・ヨルダン川西岸地区・シナイ半島を占領した(地図 C)。このようにして、居住地を追われたアラブ人がパレスチナ人(パレスチナ難民)となる。

第4問 世界史上の宗教と政治との関係

A

イスラームの統治については、P. 126 の[2]がわかりやすい。アッバース朝時代まではカリフがイスラーム共同体の全権を握る仕組みだが、以降は、宗教的権威を持つカリフと政治的・軍事的権限を持つアミール・スルタンが共存する形となる。さらにカリフの権威そのものも不安定で、P. 126 の地図[A]のように3カリフが鼎立したり、地図[D]のようにカリフ位を継承していたアッバース朝が滅亡するなど、イスラーム共同体の一体性は失われていった。

スンナ派とシーア派の対立については、P. 122 の系図と P. 125 のチェックを参照。そもそもカリフとはイスラーム共同体(ウンマ)をまとめる「神の使徒の後継者・代理人」であり、第4代アリーまでは正統カリフと称される。この後、アリーの子孫のみを指導者と認めるシーア派が登場し、預言者ムハンマドの言行や慣行に従おうとするスンナ派との対立を深めていく。

ムスリムは所属する国をこえて、イスラーム法の遵守を求められる。P. 124 を見て、シャリーアが民法や刑法を含む法体系であり、その根拠がコーランの記述やムハンマドの言行にあることを確認しよう。しかし、欧米諸国とイスラーム世界が接触する17世紀以降、イスラーム諸国の統治体制は、近代的法治国家体制とイスラーム独特の体制の間で揺れ動くようになる。オスマン帝国のタンジマートやミドハト憲法の制定を想起したらよい(P. 242 の[2]参照)。

問1 正解④ (イスラーム世界の君主) 28

①P. 122 の[2]を参照。正統カリフ時代はウマイヤ朝の前で、共同体指導者が信徒の同意で選ばれていた。

②エジプトの君主の総称はファラオで、神の化身として統治した。古代エジプトは主神ラーを含む多神教であり、各国王によって、強く結びついている「神」や神官団が異なった。これは各ファラオの名前に反映される。例えば P. 72 のコラムのアメンホテプ4世の場合、もともとの名前はアメン神信仰との結合を示しているが、イクナートンに改名してからはアトン神との関係がうかがわれる。一方、シャーはイランの王号であり、例えば、P. 176 の[1]にイスマール1世が「シャーを称す」とある。

③P. 126 の[2]を参照。スルタンの称号はセルジューク朝で既に用いられている。

④P. 126 の地図 **A** の通り，本来 1 人であるはずのカリフが鼎立した。

問 2 正解① (新宗教や新宗派の歴史) **29**

- ①P. 72 の人物コラム参照。テーベの神官団と対立したアメンホテプ 4 世は，守護神アモン(アメン)を捨ててアトーン神教を創始し，神官団の勢力と一線を画した。王の死後は神官団が再び台頭した。後継ファラオであるツタンカーメンの名前に，「アメン」が入っていることに気づくだろうか？
- ②P. 243 にイランの改革・革命運動が整理されている。すべてカージャール朝の専制支配や，浸透してくるイギリス勢力に対するもの。イル=ハン国はモンゴル系の国家(P. 38 を参照)。
- ③P. 194 を参照。宗教改革と言えばルター(ドイツ)・カルヴァン・ツヴィングリ(スイス)が有名だが，年表にあるように，ウィクリフやフスの教会改革運動からのつながりがあることを確認したい。
- ④巻末に中国の民衆反乱一覧がある。清代にも白蓮教徒の乱が発生しているので確認しよう。

問 3 正解② (イスラーム法の担い手やイスラーム世界における政治運動) **30**

- ①ウンマは信徒全体の共同体であり，その指導者である知識人層はウラマーと呼ばれる。P. 124 を参照。日常生活の指導だけでなく，欧米列強に対する民族運動の先頭に立つこともあった。例えば P. 243 にあるタバコ=ボイコット運動などが典型である。
- ②P. 242 の **1** で，ワッハーブ運動にサウード家の支持があることを確認。その後，イギリスの支援を受けてサウジアラビア王国の成立に至る過程は P. 272 の **3** を参照。アラブ人は部族社会の伝統が根強いので，このような〇〇家という単位で事象を見ることも重要である。
- ③タリバン(ターリバーン，タリバーン)などイスラーム原理主義については P. 300 の用語解説を参照。欧米諸国とイスラーム世界の接触がはじまって以降，西欧化・近代化・経済発展という要素と伝統を守ろうとする復古主義的思想が対立してきた。現代にイスラームの原点を復興させようとするイスラーム原理主義の多くは，穏健で現実的な改革派であるが，紛争を引き起こすタリバンのような過激派も存在する。タリバンはアフガニスタンを実効支配していたことがあり，バーミヤンの仏像を破壊して非難を浴びた。チュニジアはアラブ諸国の民主化運動

「アラブの春」の起点となった国。P. 314の 2 を参照。

- ④戦後の西アジアについては P. 300 の 1 を見てほしい。1979 年には重要事項が重なる。アラブの盟主だったはずのエジプトはイスラエルと和平を結ぶ一方、イラクにはサダム=フセインが登場して度重なる戦争を引き起こすこととなる。イランではパフレヴィー朝に対する革命で、ホメイニが実権を握る。

B

コルテス・ピサロがほんのわずかな軍勢でアメリカ大陸を征服できた背景には、宗教・文化の違いがある。P. 185 の用語解説を参照。以降、アメリカ大陸とヨーロッパの間で人やモノの相互移動が起こり、社会全体が変容していく。P. 186 の¹を見て、相互にもたらされたモノを一通り眺めたうえで、現代人の食卓を賑やかにしている代表的な農作物が全世界に広まるようすを確認したい。

一方、キリスト教の布教によって、アメリカ大陸はラテンアメリカを中心としてカトリック世界に取り込まれていくが、布教に際して宣教師たちが見たものは、先住民の悲惨な状況であった。鉱山労働や免疫を持たない病疫によってインディオ人口が激減する中、ラス=カサスのようにスペインの統治の不当性を訴える聖職者もいた(P. 186 の²や人物コラム)。

問 4 正解③ (ヨーロッパ諸国の海外植民地) ³¹

- a P. 210・211 の年表や地図にあるように、ケベックはフランス領であったが、18 世紀半ばには周辺を含めてイギリス領になる。
- b P. 258 の²を参照。オーストラリア・ニュージーランドはイギリス植民地となるが、その後 20 世紀初頭には自治植民地となる(P. 225 の²)。イギリス系移民の多い植民地に関しては自治領とすることで、本国の負担を減じることができた。

問 5 正解④ (キリスト教の歴史) ³²

- ①④P. 90 の¹を参照。ネロ帝やディオクレティアヌス帝の迫害を経て、コンスタンティヌス帝がキリスト教を公認し、帝国支配の支柱として利用した。この間キリスト教徒は隠れて信仰を維持し、多くの殉教者も出た。P. 95 で、地下墓室カタコンベ(迫害時の礼拝にも用いられた)や、ペテロ・パウロなどの殉教者を確認しておきたい。
- ②P. 77 の³にあるように、ゾロアスター教は極めて古い宗教で、「最後の審判」の思想などでキリスト教成立に影響を与えている。一方、マニ教はゾロアスター教・キリスト教・仏教などが融合したものであり、この文は誤りとなる。
- ③P. 95 を参照。『旧約聖書』はヘブライ語、『新約聖書』はギリシア語で書かれた。一方、『コーラン』はアラビア語で記された。P. 122 の³を参照。

問 6 正解③ (アメリカ大陸の文明) ³³

P. 184・185 にアメリカ大陸の諸文明の地図，特色の一覧表が示されている。基本事項を整理しよう。マヤ文明の二十進法は盲点だったかもしれないが，P. 185 の古代文明の表では，太字で記載している。

C

問 7 正解② (仏教の歴史) 34

- ① 東南アジア諸国家の宗教分類は必須。P. 102 の①に色分けしてあるので見ておこう。タイ・ビルマは一貫して上座仏教である。
- ② 渡印僧については P. 119 のコラムで整理している。まずは、その僧侶の時代の中国・インドの王朝をまとめ、著作を確認しよう。陸路で渡印した玄奘と海路で旅行した義浄の違いにも注意したい。
- ③ 義浄の旅行路は P. 27 で確認できる。シュリーヴィジャヤを訪れた義浄は仏教の隆盛を『南海寄帰内法伝』に記した(P. 102 の下部年表)。
- ④ P. 175 を参照。高麗版大蔵経はモンゴル軍撃退を祈願したもの。朝鮮半島の仏教文化としては、同ページの新羅の仏国寺も有名である。

問 8 正解① (清末の民衆運動) 35

まずは P. 249 の③を見てほしい。アロー戦争の結果、天津条約・北京条約(P. 250 の下部参照)を締結し、キリスト教布教の公認など、有利な条件を認められた列強は、太平天国の乱で「滅満興漢」を唱える反乱軍と戦う清朝側についた。条約が無効となるのを恐れた側面もあるだろう。このあたりから、中国では仇教運動が盛んになる。P. 248 の年表でも確認したい。

P. 249 の③にあるように、上帝会(拝上帝会)を組織したのは洪秀全である。彼は太平天国の指導者となった。上帝会にはキリスト教の影響がうかがえる。

仇教運動の流れの中で、「扶清滅洋」を唱え、山東省で組織された集団が義和団である(P. 250 の①)。この時は、義和団と清朝が結び、列強 8 カ国連合軍と戦うことになったが敗北した。

新文化運動(文学革命)については P. 274 の②を参照。第一次世界大戦の戦勝国であった中国であったが、パリ講和会議でも要求は通らず、人々の不満が高まっていた。そこに、ロシア革命の衝撃が加わり、中国でも社会改革を多方面で進める動きが盛り上がる。陳独秀・胡適・魯迅らは文学そのもののあり方を変えて口語文学を提唱し、民衆に直接語りかけて社会改革をもめざしたのである。このような新思想の勃興が、五・四運動の背景となった。

問 9 正解③ (アジアのナショナリズム) 36

東南アジア諸国の民族運動と独立過程は、それぞれの国の体制や社会のあり方に大きく影響しているので、P. 247, 273, 298 の年表を参考に各国史として整理してみよう。

- a P. 273 の^[6]で各国の民族運動を整理。ビルマのタキン党，インドシナ共産党（ホー＝チ＝ミン指導），インドネシア国民党（スカルノ指導）などが重要である。
- b P. 273 の^[5]でインドの民族運動を確認。ガンディーの非暴力抵抗運動はコラムもあるので読んでみよう。インド国民会議派の中には急進派もいたが，ネルーはガンディーとともに反英運動の先頭に立った。国民会議派のカルカッタ大会における 4 綱領や，同ラホール大会のプールナ＝スワラージは最低限おさえておきたい。なお，このような反英運動を分断しようとしたイギリスの動きも重要である。ベンガル分割令はその典型で，ヒンドゥー勢力とイスラーム勢力の対立をあおって，反英運動の矛先を変えようとした。ジンナーが全インド＝ムスリム連盟をつくって，イスラーム地域の分離独立をめざしたことは，このような流れの中で理解したい。